

先哲に学ぶ人間学

いい機会・いい場所・いい人・いい書物に出逢うこと

令和二年十二月十一日

税理士法人 中央総研 山川 晋

人はややもすれば努力の無功に終わること訴えて嗟嘆するもある。されど努力は功の有と無によって、これを敢えてすべきや否や判すべきではない。努力とということが人の進んで止むことを知らぬ性の本然であるから努力すべきなのである。努力して居る、もしくは努力せんとして居る、ということを忘れて居て、そして我が為せることがおのずからして努力であつて欲しい。そうあつたらそれは努力の真諦であり、醍醐味である。

幸田 露伴

勇気を出せ。たとえ肉体に、いかなる欠点があろうとも、わが魂は、これに打ち勝たねばならない。二十五歳、そうだ、二十五歳になつたのだ。今年こそ、男一匹、ほんものになる覚悟をせねばならない。

ベートーベン

感動しない人は疲れがちです。その反対に感動すると、エネルギーをものすごく回復するのです。

鍼山 秀三郎

批判の目があつたら学べません。素直でないと本当の技術は入っていきません。

小川 三夫

この秋は、雨か嵐か知らねども、今日のつとめの、田草取るなり。

二宮 尊徳

音もなく、香もなく、つねに天地は、書かざる経を繰り返しつつ。

二宮 尊徳

大事をなさんと欲せば、小なる事を、怠らず勤むべし。小積もりて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して、小なる事を怠り、出来難き事を憂いて、出来易き事を勤めず。それゆえ、終に大なる事をなす事あたわづ。喻えば、百万石の米と雖も、粒の大なるにあらず。

二宮 尊徳

道徳なき経済は罪悪であり、経済なき道徳は寢言である。

二宮 尊徳

万巻の書を読み、万里を行く。

本多 静六

人生即努力、努力即幸福。これが私の体験社会学の最終結論である。

本多 静六

平凡人は、いついかなる場合も、本業第一たるべきこと。本業専一たるべきこと。

本多 静六

職業上の成功こそは、他のいかなる成功にもまして働くその人自身にも、またその周囲にも人生の最大幸福をもたらすものである。

本多 静六

平生からおよそ善い物・善い人・真理・善い教・善い書物、何でも善いもの・勝れているもの・尊いものには、できるだけ縁を結んでおくことです。これを勝縁といい、善縁といいます。

とにかく、折角善い人に会い、善い書を見、善い話の席につらなりながら、キヨトンとしたり、欠伸をしたり、そっぽを向いたりしている人間はだめであります。うつけ者です。

環境が人を作るということに捉われてしまえば、人間は單なる物、單なる機械になってしまいます。

人は環境を作るからして、そこに人間の人間たる所以がある。自由がある。即ち主体性、創造性がある。だから人物が偉大であればあるほど、立派な環境を作る。人間が出来ないと環境に支配される。

人間には、これあるによつて初めて人間であるという本質的要素と、必ずしもそうではない附属性の要素との二つがある。古神道でいう、心が明るい、清い、汚れない、人を愛する、人を助ける、人に報いる、精進する、忍耐する等々の徳性こそがその本質だ。これあるによつて初めて人間となり得るのである。これに対して、智能や技能というものはあるにこしたことはない。確かに大事なものだけれども、それは特別の例外を除けば程度の差というべき附属性の要素である。それより更に大切なのは、良い習慣、習性を持つことである。

名前をつけるということは大事だ。だから、名前をおろそかにしてはいけないの「命名」と言う。「命」と言う字は絶対的という意味でいのちという。だから非常な意味をもつて付ける。子供なら「お前は大きくなつたらお前の名の通り、この通りに修行すればいいんだよ」という意味でつけるのが命名だ。

尊敬される会社だけが
真のブランドになれる

尊敬される会社とは、社員やお客様、仕入先、
地域の人たちを幸せにする会社です。社員の幸せ
を通じて世の中の幸せに貢献しつづけていけば、
おのずと周囲から尊敬される会社、すなわち「一
流の会社」となるのです。

塚越寛先生

「末広がりのいい会社をつくる」（文屋）より

会社が周りから「いい会社だね」と讃められたり、尊敬されることで、社員のモチベー
ションがさらに高まっていくと思います。

苦難にまざる教師なし

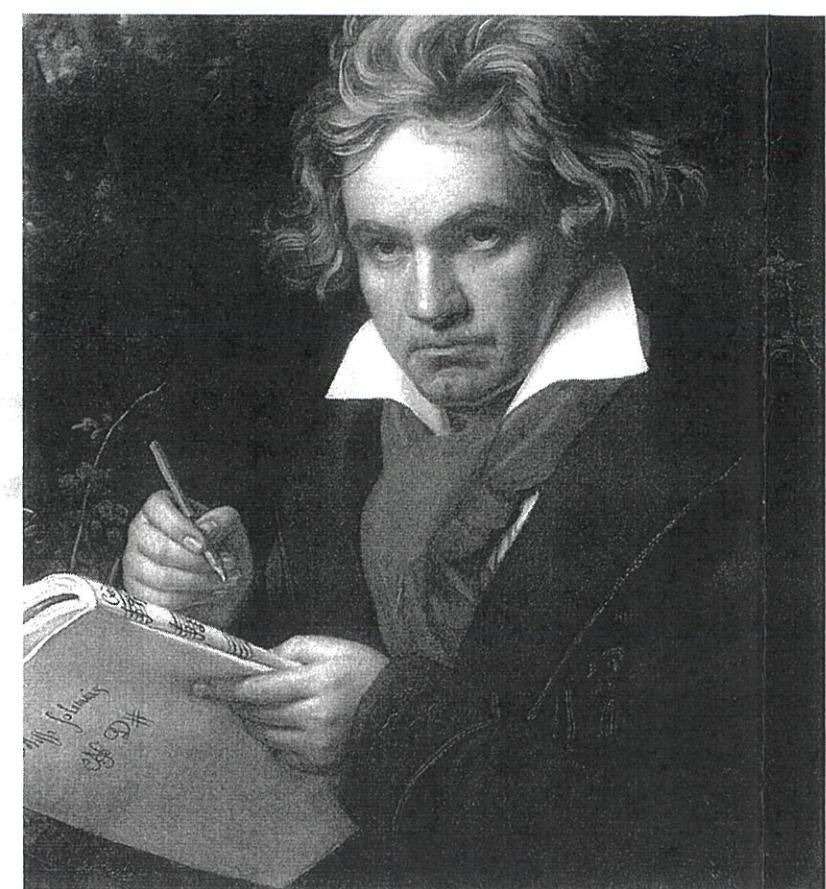
EUでは「欧洲の歌」に「第九」の旋律が使われているほどです。ベートーヴェンの魅力をひとと表現すると、王侯貴族から市民へとヨーロッパ社会の主役が交代する動乱期に、一人の作曲家として独立自尊の生き方を貫いたこと、そしてその前衛的な作風を確立させた点に凝縮されます。

ベートーヴェンと同時代を生き、共にクラシック音楽を代表する作曲家であるハイドンやモーツアルトと比べるとその違いは歴然です。当時の音楽は王侯貴族のためのもので、音楽家は教会や宮廷に属し自立した作曲家として、市民のための音楽をつくり続けました。

ハイドンは七十七年の生涯で百四曲、モーツアルトが三十五年で四十一曲（現在では第三十七番は欠番）の交響曲を残していますが、ベートーヴェンは五十六年で九曲しかありません。ハイドンやモーツアルトは貴族からの依頼でパートナーの度に新曲を生み出さなければならず、貴族に受け入れられやすい王道の音楽を短時間でつくり続けたものの、ベートーヴェン

人生観を築いたもの

ベートーヴェンの生涯を辿る上



ベートーヴェン

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン——1770～1827年。ドイツ中西部ボンに生まれる。ハイドン、モーツアルトと並んで「ウィーン古典派」の三大作曲家の一人。難聴という作曲家にとって絶望的な困難に襲われるも、溢れる創意で数々の名曲を生み出し、その後19世紀に広まった「ロマン主義音楽」にも大きな影響を与えた。56年の生涯で9つの交響曲を含むおよそ500曲の作品を生み出した。

樂聖・ベートーヴェン。音樂家にとって生命線である聽力を失いながらも、數々の傑作を残した偉業は多くの人が知るところである。フランス革命が勃発した激動の時代を生き、幾多の絶望と苦悩を乗り越えた生涯を、長年ベートーヴェン研究に当たる平野昭氏に語っていただく。この年末に生誕二百五十周年を迎えるベートーヴェンの生き方が教えてくれるものとは――。

運命を受け入れて生きたベートーヴェンに学ぶもの



学者 平野 昭

ひらの・あきら——昭和24年神奈川県生まれ。武蔵野音楽大学大学院修了。西洋音楽史及び音楽美学領域、18～19世紀ドイツ語圏器楽曲の様式変遷を研究。特にハイドン、モーツアルトからベートーヴェン、シューベルトに至る交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタを中心にソナタ諸形式の時代様式及び個人的特徴を研究。沖縄県立芸術大学、静岡文化芸術大学、慶應義塾大学教授を歴任。著書に『ベートーヴェン』(新潮社)など多数。

ベートーヴェンが愛され続ける理由

「交響曲第九番（合唱付）」「交響曲第五番（運命）」「ピアノ曲エリーゼのために」などで知られる作曲家・ベートーヴェンが、今年生誕二百五十周年を迎えます。二百五十年前のことですが、日記や手紙など当時の文書記録が多く残っているため、伝記的な史実が辿れる一方、没後に広まった伝説的な逸話が通説としてまり通っている部分も多くあります。例えば、「エリーゼのために」「月光ソナタ」といった曲名は、ベート

ーヴェンの死後に名づけられたニックネームですので、これらの曲名で知れ渡っていることをベートーヴェン本人が聞いたなら驚くことでしょう。「運命」についても、「ジヤジャジャジャーン」という出だしのメロディを「運命はこのように戸を開いてやってくる」と本人が語ったことで曲名になったとかではありません。

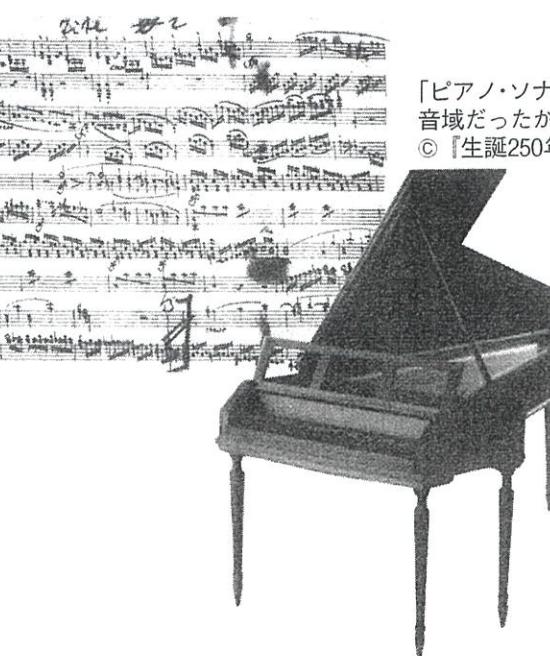
とはいえてベートーヴェンの曲は没後二百年近く経つたまでも全世界で親しまれています。日本では年末に合唱付きの「第九」交響曲演奏会が恒例行事と化しており、

で重要なのが、彼が生まれ育った環境と、当時のヨーロッパの時代背景です。一七七〇年十二月十六日、神聖ローマ帝国のボン（旧西ドイツ時代の首都）で生まれます。父はボン宫廷楽団の楽士、祖父は宫廷楽団の楽長を務めた音楽一家で、幼少期よりスバルタ教育を受け育ちました。アルコール依存症を患った父親に深夜叩き起され、夜通し特訓をさせられたエピソードはよく知られるところでしょう。当時のヨーロッパ、とりわけフランスでは王侯貴族が経済的に続し、それがフランス革命へと繋がっていくのです。父も酒に溺れていたこともあり、宫廷楽団から解雇され失職しました。

ベートーヴェンより十四年早く生まれたモーツアルトが六歳から演奏会をしていた事実を知った父は対抗意識を燃やし、ベートーヴェンが七歳の時に音楽家としてデビューさせました。そして十一歳の時に宮廷オルガン奏者のネーフェ先生の推奨によって、作品集を出版し、その後も宮廷オルガンの

代理演奏を任されるなど天賦の才を遺憾なく發揮します。そしてそこで得た給料で父に代わって一家を支えたのです。音楽の都・ウィーンへの留学が叶ったのは十七歳の時。そこで憧れのモーツアルトと対面を果たすも、母親が危篤との連絡が入り、僅か二週間でボンへと戻ります。そして三ヶ月後に母は帰らぬ人となりました。残されたのは朝から晩まで酒浸りの父と、二人の弟。貴族の家でピアノ教師の仕事を懸命に勤め、一家を養いました。この過ぎていったのです。

一七八九年にフランス革命が勃発した時、ボン大学に在学していたベートーヴェンはフランス革命の精神的源流となつた自由・平等・博愛の精神など啓蒙思想に強い共感を持つようになります。大学で詩人のゲーテやシラーについて学んだ他、ギリシャ文学や現代哲学の授業を受けたとの成績記録も残っており、当時「純粹理性批判」や「実践理性批判」などで話題となっていたカントについても学んでいます。また大変な読書家で読書協会というサークルにも参加し



「ピアノ・ソナタ第11番」の自筆譜と30代前半まで実際に使用していたピアノ。当時は5オクターヴの音域だったが、ベートーヴェンの作風の広がりと共に、ピアノの音域も広がっていった
©『生誕250年 徹底解剖！ベートーヴェン32のピアノ・ソナタ』(音楽之友社)より

の、ドイツで起こったブルシェンシャフトの学生運動やイタリアのカルボナリの乱、ロシアのデカブリストの乱など、一八四八年革命に向かって市民運動や小競り合いが絶えませんでした。また、ベートーヴェンの私生活においても、早世した弟の息子の親権を巡って裁判を起こしたり、実らぬ恋に煩悶したりと、幾度となく苦難に直面しています。

そうしたバックグラウンドで作曲されたのがこの二曲です。「ミサ・ソレムニス」には「神よ、我われに平和を与え給え」という歌詞があり、ミサ曲でありながら平和を祈願する歌声の伴奏には軍隊の音楽が使用されています。そして

ベートーヴェンが再びウィーンを訪れることができたのは二十一歳になつてからのこと。残念ながらモーツアルトは前年に三十五歳で生涯を閉じており、六十歳だったハイドンの許で一年間教えを請い、その後独立を果たしました。一八〇〇年、二十九歳の時に最初の交響曲を発表したことを皮切りに、ベートーヴェンの作曲への情熱が噴出します。ところがその才能を羨むかのように、次々と苦境がベートーヴェンを襲いました。

二十代の半ば頃から難聴に悩まされるようになります。音楽家にとって命の次に大切な聴力、それ

最先端の文学や哲学、ローマ神話やギリシャ神話といった古典に親しみました。これがベートーヴェンの音楽人生の礎となりました。

ベートーヴェンの晩年の作品「第九」はシラードの頌詩『歓喜に寄せて』から着想を得ていますし、ゲーテの戯曲『エグモント』にも音楽をつけています。オペラを作曲する上でも古典の作品を参考にしているのです。

運命を受け入れて生きる覚悟

ベートーヴェンが再びウィーンを訪れることができたのは二十一歳になつてからのこと。残念ながらモーツアルトは前年に三十五歳で生涯を閉じており、六十歳だったハイドンの許で一年間教えを請い、その後独立を果たしました。一八〇〇年、二十九歳の時に最初の交響曲を発表したことを皮切りに、ベートーヴェンの作曲への情熱が噴出します。ところがその才能を羨むかのように、次々と苦境がベートーヴェンを襲いました。

二十代の半ば頃から難聴に悩まされるようになります。音楽家にとって命の次に大切な聴力、それ

が前途洋々の二十代で失われていつたベートーヴェンの心中は如何ほどだったのでしょうか。難聴を周囲に打ち明けることができず、次第に演奏会やパーティーの場から姿を消し、人付き合いが悪くなつていきました。また、慢性腸炎を患い慢性的な下痢に悩まられるなど、体の至るところに病気を抱えていたベートーヴェンは日記にこう綴っています。

「勇気を出せ。たゞえ肉体に如何なる欠点があろうとも、我が魂はこれに打ち勝たねばならない。二十五歳、そうだ、もう二十五歳になつたのだ。今年こそ、男一匹、本物になる覚悟をせねばならない」

この言葉は、ホメロスが記した古代ギリシャの英雄叙事詩『イリアス』からの引用ではないかと思われます。ホメロスは「過酷な運命は自分を強くする」との言葉も残していますが、ベートーヴェンはそうした言葉に心から共感し、自分の言葉としたのでしょう。

一八〇二年、三十一歳の時にベートーヴェンは悪化した聴覚障害の苦悩に耐え切れず、遂に命を絶とうとまで考へるほど追い込まれたようです。ウィーン郊外のハイ

リゲンシュタットで弟たちに向て遺書を書いています。

「自己の芸術的能力をすべて發揮するより前に死がくるとしたら、それはあまりに早すぎる。(略)だが、そんな場合でも私は幸せだろう。なぜならそれが、私を果てることのない苦しみの状態から解放されよ、望むときにつでも来るがよい、私は勇敢にお前に立ち向かうだろう」

この手紙はベートーヴェンの死後に引き出しの中から見つかったもので、実際に弟たちが目にしたかどうかは定かではありません。しかしよく読むと、これは遺書ではなく、天から与えられた運命を受け入れ、力強く生き抜こうといふ宣言であることが分かります。

ホメロスは「過酷な運命は自分が湧いてきたのでしょう。耳が自らしたためるうちに、不思議と力が湧いてきたのでしよう。耳が聞こえないとしても、自分の中からメロディがなくなつたわけでは受け入れ、力強く生き抜こうといふ宣言であることが分かります。

一八〇二年、三十一歳の時にベートーヴェンは悪化した聴覚障害の苦悩に耐え切れず、遂に命を絶とうとまで考へるほど追い込まれたようです。ウィーン郊外のハイ

リゲンシュタットで弟たちに向て遺書を書いています。

「自己の芸術的能力をすべて發揮するより前に死がくるとしたら、それはあまりに早すぎる。(略)だが、そんな場合でも私は幸せだろう。なぜならそれが、私を果てることのない苦しみの状態から解放されよ、望むときにつでも来るがよい、私は勇敢にお前に立ち向かうだろう」

この手紙はベートーヴェンの死後に引き出しの中から見つかったもので、実際に弟たちが目にしたかどうかは定かではありません。しかしよく読むと、これは遺書ではなく、天から与えられた運命を受け入れ、力強く生き抜こうといふ宣言であることが分かります。

ホメロスは「過酷な運命は自分が湧いてきたのでしょう。耳が自らしたためるうちに、不思議と力が湧いてきたのでしよう。耳が聞こえないとしても、自分の中からメロディがなくなつたわけでは受け入れ、力強く生き抜こうといふ宣言であることが分かります。

一八〇二年、三十一歳の時にベートーヴェンは悪化した聴覚障害の苦悩に耐え切れず、遂に命を絶とうとまで考へるほど追い込まれたようです。ウィーン郊外のハイ

深い祈りから生まれた傑作

しかし、運命には逆らうことができませんでした。四十代半ばにはほとんど聴力を失い、ラップのような形の大きな補聴器を使い始め、一八一八年、四十七歳からは

第八番までを一気に書き上げました。ベートーヴェン研究の第一人者として知られるフランスの文学者、ロマン・ロラン（一八六六—一九四四年）はこの期間を「傑作の森」と呼んでいます。

ベートーヴェンの人生を語る上で外せないのが晩年の二作品、一八二三年の「ミサ・ソレムニス」と一八二四年の「交響曲第九番」です。この二曲は当時のヨーロッパの社会情勢への憂いと、私生活での苦悩から生まれた「祈り」が筆談帳を使用しています。

ベートーヴェンは作曲家として一層の失脚後に敷かれたウィーン体制で平和を取り戻しつつあつたもの

筆談帳を使用しています。

ベートーヴェンの人生を語る上で外せないのが晩年の二作品、一八二三年の「ミサ・ソレムニス」と一八二四年の「交響曲第九番」です。この二曲は当時のヨーロッパの社会情勢への憂いと、私生活での苦悩から生まれた「祈り」が筆談帳を使用しています。

ベートーヴェンは作曲家として一層の失脚後に敷かれたウィーン体制で平和を取り戻しつつあつたもの</p

令和2年を振り返り、令和3年に期待するもの

今年、令和2年の最大の事件は、何といっても『武漢コロナ』感染でしょう。後世の人達は、スペイン風邪や、ペストに並ぶ歴史に残る疫病だったと言うでしょう。しかも、人工的に作られた可能性が高いことが重要です。

政治・経済に及ぼす影響は、二つの世界大戦、世界大恐慌にも匹敵するものです。

二十世紀初頭に、マルクスの唱えた社会主义を経て共産主義という経済システムは、ソ連という壮大な実験の失敗に終わりました。中華人民共和国も、同じ運命を辿るでしょうが、最後の悪あがきには注意する必要があります。

一方、アメリカ合衆国も、相対的に力が衰え、日本の周辺も、不安定な軍事的状況になつてきました。 尖閣には、自衛隊を駐屯させる勇氣ある政権であってもらいたいし、国民もそれ相当の覚悟が必要です。

さて、我々、中小企業の社長は、この事件・この時期を、どう考え、どう対処すればいいのでしょうか？

巷間言われる、「登り坂・下り坂・まさか」の、まさに「まさか」が、今です。

こういう時に、社長に求められるのは、まず“元氣”です。“明るさ”です。“若さ”です。“粘り強さ”です。 平常時のような、論理的だとか、合理的だとか、所謂、学校での優等生的な考え方や行動は、全く役に立ちません。

何故なら、社員全員が、不安なのです、心配なのです。どうすればいいのか判らないのです。社員は、社長の発言や行動を、固唾を呑んで見守っているのです。

心配するな！我々の向かうべき方向は、こちらだ！一緒に、進んで行こう！と、社長が明るく笑顔で、社員全員をリードすることです。

安岡正篤先生が、『素心規』の中で、次のように教えて下さっています。

* 困窮に処するほど快活にしよう。窮すれば通ずるものである。

* 亂世ほど余裕が大切である。余裕は心を養うより生ずる、と。

そして、社長の若さは、決定的に大切なものです。 社長が60代ならば、次世代にバトンタッチするチャンスです。おそらく、次世代は、30歳前後でしょう。親である社長は、次世代が、まだ若いと思い、ついつい先延ばししています。同業他社は、その間に、次世代に経営を移しているのです。又とない、このチャンスを逃さないことです。社長も、創業時は若かったです。

百年に一回の大変化を、ピンチで終わらさず、大チャンスに変える勇気を持って下さい。 私ども、中央総研も、今年、世代交代をしました。若い中央総研にご期待下さい。かつて、吉川英治が、結婚式で「菊根分け後は自分の土で咲け」とはなむけの言葉を贈ったそうです。私も、同じ心境です。



今月のポイント

人生は心がけと努力